

第2章 史跡船来山古墳群の概要

第1節 指定に至る経緯

船来山は濃尾平野の北縁部に所在する東西約2キロメートル、南北約600メートル、比高約90メートルの独立丘陵である。丘陵北側は急峻な斜面を、南側は比較的緩やかな斜面をなし、両斜面ともいく筋もの谷川により支尾根が形成される。丘陵西端には糸貫川が南流し、古代には丘陵の南約2キロメートルの位置を東山道が通るなど、眺望の利く要衝を占めている。

船来山古墳群は弥生時代終末期から古墳時代終末期(3世紀～7世紀)に船来山に築造された墳丘墓及び古墳群の総称である。昭和4年に小川栄一が丘陵西部を中心に初めて古墳群として紹介し、昭和42年には檜崎彰一が24号墳の発掘調査を行った。昭和60年からは開発計画への対応として岐阜県教育委員会及び糸貫町教育委員会(現・本巣市教育委員会)が分布調査を行い、80基を超える古墳を確認した。平成6年度には糸貫町教育委員会が4基の古墳の発掘調査を、平成7年度からは糸貫町・本巣町合同調査団及び岐阜市が本巣市側で162基の墳墓、岐阜市側で52基の墳墓の発掘調査を行った。こうした調査を通じて284基の墳墓を確認し、東海最大級の古墳群であることが明らかとなった。

その後開発計画の中止を受けて、平成19年からは本巣市教育委員会が古墳群の保存と詳細な内容把握を目的とする測量調査を行った。その結果新しく10基の古墳を確認し、別個の古墳と考えられていた2基の古墳が1基の前方後円墳であることを明らかにするなど、古墳群全体の詳細が判明した。これにより、船来山全体で新たに前方後円墳1基、前方後方墳5基、帆立貝型古墳1基、円墳2基、方墳1基を確認し、墳形不明の横穴式石室に加え方形周溝墓や詳細不明なものを合わせて計290基の墳丘墓及び古墳の存在が明らかとなった。こうした成果を踏まえ、平成28年には価値づけの検討を行い、平成29年に『船来山古墳群総括報告書』を刊行した。また、平成30年にはゴルフ場開発部分の土地について寄付を受けることができた。

以上のように古墳時代の墓制及び被葬者の社会的な関係や集団構成の在り方の変遷を知る上で重要であることから、本巣市側の一部である112基の古墳(弥生時代方形周溝墓1基を含む)を丘陵中央部の南側斜面を中心とする範囲について発掘調査の行われていない古墳を含めて平成31年2月26日に国史跡に指定された。

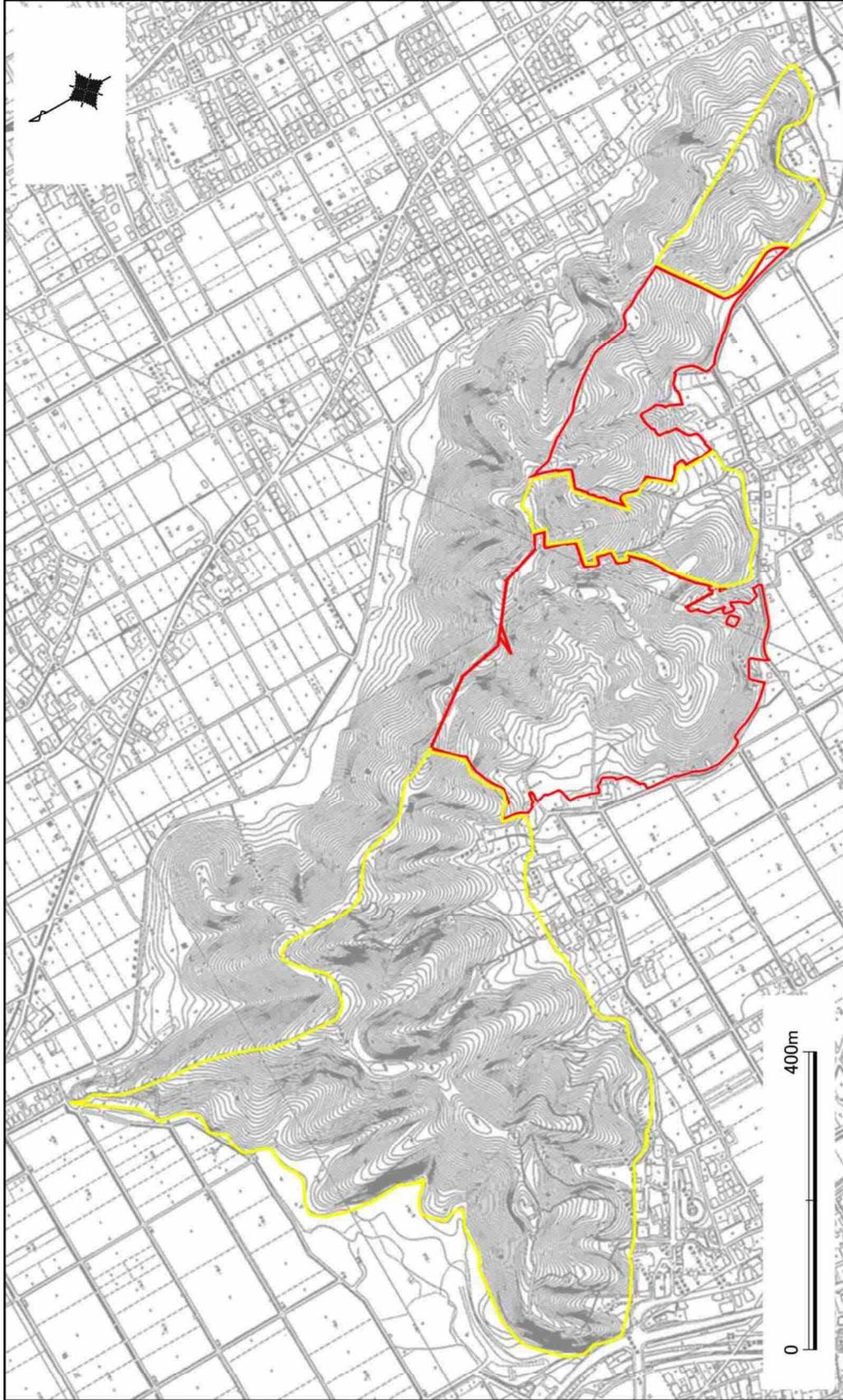


図6 史跡指定範囲及び史跡追加指定検討範囲

第 2 節 指定の状況

(1) 史跡指定告示

○ 平成 30 年文部科学省告示第 20 号 (※該当部分を一部抜粋)

文化財保護法(昭和 25 年法律第 214 号)第 109 条第 1 項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定したので、同条第 3 項の規定に基づき告示する。

平成 31 年 2 月 26 日

文部科学大臣 柴 山 昌 彦

名 称：船来山古墳群(ふなきやまこふんぐん)

指定基準：二 貝塚・集落跡・古墳その他この類の遺跡

特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会告示第 2 号、平成 7 年 3 月 6 日一部改正文部省告示第 24 号)による。

所 在 地：岐阜県本巣市上保字船来山 1203 番 外 319 筆

指定方法：地番指定

指定面積：155,420.74 m² (※登記簿面積)

管理団体指定：本巣市(令和元年 10 月 10 日文化庁告示第 12 号)

名 称	所在地	地 域
船木山古墳群	岐阜県本巣市上保字弥勒寺	163番、164番1、164番2、165番、166番、167番、170番1、170番2、170番3、171番、172番、173番1、173番2、174番、175番、176番、177番、178番1、178番2、193番
	同 上保字野畔	454番1
	同 上保字船来山	1203番、1204番、1205番、1206番1、1206番2、1206番3、1206番4、1206番5、1206番6、1206番7、1206番8、1206番9、1206番10、1206番12、1206番13、1206番14、1206番15、1206番16、1206番17、1206番18、1206番19、1206番20、1206番21、1206番22、1206番23、1206番24、1206番25、1206番26、1207番、1208番、1209番、1210番、1211番、1212番1、1212番2、1212番3、1212番4、1212番5、1212番6、1212番7、1212番8、1212番9、1212番10、1212番11、1212番12、1213番1、1213番2、1213番3、1213番4、1213番5、1213番6、1213番7、1213番8、1213番9、1213番10、1213番11、1213番12、1213番13、1213番13、1213番14、1213番15、1213番16、1213番17、1213番18、1213番19、1213番20、1213番21、1213番22、1213番23、1213番24、1213番25、1213番26、1214番、1215番、1216番1、1216番2、1217番、1218番、1219番、1220番1、1220番2、1221番、1222番1、1222番2、1223番、1224番、1225番1、1225番2、1226番、1227番、1228番1、1228番2、1229番、1230番、1231番1、1231番2、1231番3、1231番4、1231番5、1231番6、1231番7、1231番8、1231番9、1231番10、1231番11、1231番12、1231番13、1231番14、1231番15、1231番16、1231番17、1231番18、1231番19、1231番20、1231番21、1231番22、1231番23、1231番24、1231番25、1231番26、1231番27、1231番28、1231番29、1231番30、1231番31、1231番34、1232番、1233番、1235番、1236番1、1236番2、1236番3、1238番1、1238番2、1239番1、1239番2、1239番3、1239番4、1239番5、1239番6、1239番7、1239番8、1239番9、1239番10、1239番11、1239番12、1239番13、1239番14、1239番15、1239番17、1240番1、1240番2、1240番3、1240番4、1240番5、1240番6、1240番9、1240番10、1240番15、1240番19、1247番4、1248番1、1248番2、1248番3、1248番4、1248番5、1248番6、1248番7、1248番8、1248番9、1248番10、1248番11、1248番12、1248番13、1248番14、1248番15、1248番16、1248番17、1248番18、1248番19、1248番20、1248番21、1248番22、1248番23、1248番24、1248番25、1248番26、1248番27、1248番28、1248番29、1248番30、1248番31、1248番32、1248番33、1248番34、1248番35、1248番36、1248番37、1248番38、1248番42、1248

	番43、1248番44、1248番46、1248番54、1248番55、1248番66、1248番108、1248番109、1248番110、1248番111、1248番112、1248番113、1248番114、1248番115、1248番116、1248番117、1248番118、1248番119、1248番120、1248番121、1248番122、1248番123、1248番124、1248番125、1248番126、1248番127、1248番128、1248番129、1248番130、1248番131、1248番132、1248番133、1248番134、1248番135、1248番136、1248番137、1248番138、1248番139、1248番140、1248番141、1248番142、1248番143、1248番144、1248番145、1248番146、1248番147、1248番148、1248番149、1248番150、1248番151、1248番152、1248番153、1248番154、1248番155、1248番156、1248番158、1248番159、1248番160、1248番161、1248番167、1248番167、1248番183、1248番186、1248番206、1251番18、1251番19、1251番20、1251番21、1251番22、1251番23、1251番24、1251番25、1251番26、1251番27、1251番28、1251番29、1251番30、1251番31、1251番32、1251番33、1251番34、1251番35、1251番36、1251番38、1253番1、1253番2、1254番、1255番
同 上保字山谷	472番、473番1、473番3、474番1、481番3
同 上保字山下	526番、527番、528番、529番
同 郡府字郡府山	456番1、456番3

(2) 指定説明文

船来山は濃尾平野の北縁部に所在する東西約2キロメートル、南北約600メートル、比高約90メートルの独立丘陵である。丘陵北側は急峻な斜面を、南側は比較的緩やかな斜面をなし、両斜面ともいく筋もの谷川により支尾根が形成される。丘陵西端には糸貫川が南流し、古代には丘陵の南約2キロメートルの位置を東山道が通るなど、眺望の利く要衝を占めている。

船来山古墳群は弥生時代終末期から古墳時代終末期(3世紀～7世紀)に船来山に築造された墳丘墓及び古墳群の総称である。昭和4年に小川栄一が丘陵西部を中心に初めて古墳群として紹介し、昭和42年には檜崎彰一が24号墳の発掘調査を行った。昭和60年からは開発計画への対応として岐阜県教育委員会及び糸貫町教育委員会(現・本巣市教育委員会)が分布調査を行い、80基を超える古墳を確認した。平成6年度には糸貫町教育委員会が4基の古墳の発掘調査を、平成7年度からは糸貫町・本巣町合同調査団及び岐阜市が本巣市側で162基の、岐阜市側で52基の古墳の発掘調査を行った。こうした調査を通じて284基の古墳を確認し、東海最大級の古墳群であることが明らかとなった。

その後開発計画の中止を受けて、平成19年からは本巣市教育委員会が古墳群の保存と詳細な内容把握を目的とする測量調査を行った。新たに7基の古墳を確認し、別個の古墳と考えられていた2基の古墳が1基の前方後円墳であることを明らかにするなど、古墳群全体の詳細が判明した。これにより、船来山全体で前方後円墳3基、前方後方墳3基、円墳・方墳8基、墳形不明の202基の横穴式石室に加え、方形周溝墓や詳細不明なものを合わせて計290基の墳丘墓及び古墳の存在が明らかとなった。

墓域としての利用は弥生時代終末期の方形周溝墓に始まり、古墳時代前期前半には丘陵西部の主尾根上に墳長20から30メートルほどの前方後方墳や小規模な方墳が築造される。前期後半には古墳群内最大の墳長65メートルの前方後円墳である5号墳が丘陵西部の主尾根上に築造される一方で、丘陵中央部や丘陵東部に墳長40メートル前後の前方後円墳や小型の円墳が築造される。中期前半には古墳の築造は見られないが、中期後半には前方後円墳や造出付円墳が単独で築造される。中期末から後期前半には丘陵中央部の主尾根から南に派生する支尾根を中心に、3基の赤彩が施された横穴式石室を含む多数の横穴式石室の築造が開始される。古墳時代後期後半から終末期にかけて丘陵中央部での古墳の築造は継続する

が、主要な築造地区は丘陵東部へと移り、古墳群としての終焉を迎える。船来山古墳群では前期後半以降いくつかの地区で短期間に複数の古墳が築造されており、特に後期以降は丘陵南側斜面を中心に複数の支尾根に多数の横穴式石室が築造されるなど、複数の地区で併行して古墳が築造される。これらの石室は掘方を深く掘ることで天井石の架構を可能とするもので、当初からほとんど墳丘を持たない古墳であった可能性が想定される。また、丘陵中央部及び丘陵東部に築造された横穴式石室には、前期の古墳の墳丘上や周囲に近接して構築されたものがある。古墳群全体から多くの遺物が出土しており、前期後半の 98 号墳からは方形板革綴短甲・鉄剣・鉄鏃が、24 号墳からは銅鏡・石釧・玉類・鉄刀剣・銅鏃・農工具が出土しており、中期後半の 81 号墳と 96 号墳からは円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。また、後期の古墳からは玉類・鉄刀・鉄鉾・鉄鏃・馬具・農工具・須恵器等が出土しており、玉類では 19 号墳から雁木玉が、272 号墳からは斑文トンボ玉が出土している。

以上のように船来山古墳群は、弥生時代終末期から古墳時代前期、そして古墳時代中期後半から終末期にかけての墳丘墓及び古墳群として東海最大級をなす。弥生時代終末期の方形周溝墓の築造の後、前期前半には丘陵西部に前方後方墳と方墳が、前期後半には主に丘陵中央部と東部に前方後円墳と円墳が、後期には丘陵中央部の南側斜面から派生する支尾根上を中心に多数の横穴式石室が、終末期には主に丘陵東部の支尾根上に多数の横穴式石室が築造される。墳形や地区を緩やかに変えつつ複数の地区で古墳の築造が併行するため、いくつかの集団による共同墓域の可能性が指摘できる。また、前期の古墳の墳丘上や直近に後期の古墳が築造される事例があり前期の古墳と後期の古墳の有機的な関係を示している。多くの古墳で発掘調査が行われており、後期から終末期にかけての石室や副葬品の詳細が明らかにされている点も重要である。よって古墳時代の墓制及び被葬者の社会的な関係や集団構成の在り方の変遷を知る上で重要であることから、今回は本巣市側の一部である 112 基の古墳を含む丘陵中央部の南側斜面を中心とする範囲について発掘調査が行われていない古墳を含めて史跡に指定し、保護を図ろうとするものである。

文化庁監修『月刊文化財』平成 31 年 2 月号より引用（一部編集）

（3）歴史的調査の成果

船来山古墳群のある船来山は、美濃地方の北部山岳地帯の入り口に位置する。船来山はこの山岳地帯の一番南にあたり、美濃平野部の中では早い時期から人々の痕跡が残っている。縄文時代草創期の遺物が収集されており、さらに船来山中央部山麓の弥勒寺境内から、早期から前期の遺物が収集されている。また、縄文時代後期の北白川上層式等の土器も出土している。弥生時代に入ると、平地では顕著な遺構や遺物はないが、山頂に近いところで方形周溝墓や土坑墓などが検出されており、弥生時代人も船来山周辺で活動していることが確認されている。古墳時代になると、前期から盛んに墳墓を造り出し、中期はその勢が少し止み、後期になると爆発的に古墳を造りだす。その総数は 240 基以上にのぼり、東海地方最大の古墳群となる。墳形も様々で多様な様相を呈しており、また横穴式石室も多く、さらに、彩色古墳もあり、一部は移築保存がなされている。船来山古墳群は以上のように色々な面を持っているが、これらの古墳を造った豪族の拠点的な集落については本巣市内で確認できていない。当節では、先ず弥生時代から古墳時代を通じて墳墓の在り方を時期別に示し、その後は歴史時代順に説明し、当該地方の歴史的層性を説明する。なお、文章中の支群名はゴルフ場開発時に谷毎に付記したものであり、単なるまとまりを示すものとなっており、この支群名をそのまま流用している。

< 船来山古墳群詳細分布調査の取り組み >

平成 25(2013)年より国史跡の指定を目指して船来山古墳群詳細分布調査を実施し、これまでに調査されていない古墳を中心に墳形・規模等を明らかにする詳細測量調査を行ってきた。これまでに古墳 11 基の測量調査を実施し、これまで 2 基の古墳とされてきたものが、1 基の前方後円墳(5 号墳)であると判明するなどの成果をあげた。調査の成果については下記のとおりである。

< 弥生時代終末期から古墳時代前期 > (図 18～図 23)

本築市側では弥生時代終末期から古墳時代の墳墓は現在 14 基確認されている。このうち X 支群の 5 号墳と 6 号墳は、2 基の古墳として認識されていたが測量調査の結果 1 基の前方後円墳とされている。弥生時代末期の 1 号方形周溝墓、土坑墓等以外は前方後円墳や前方後方墳と推定でき、船来山の首長クラスの古墳と考えられる。

表 1 弥生時代から古墳時代前期の主要な古墳一覧

支群	番号	墳形	特徴	時期・出土遺物
O	1	方形周溝墓	周溝 1.1m 幅最深部 1 m、12m×10m の長方形	弥生時代末、器台・壺・鉢等の供献土器
Z	62	前方後方墳	全長 45m、船来山西端標高 63m 中腹、河原石の葺石、前方部が低く後方部との比高差がある。(2013 年詳細測量調査実施)	
A	276			
X	67	方墳	24m×17m、長方形に近い方墳 (2015 年詳細測量調査実施)	
X	76	前方後方墳	全長 30m、前方部が低く後方部との比高差がある古墳 (2015 年詳細測量調査実施)	
Y	4	前方後方墳	全長 20m (2019 年詳細測量調査実施)	
G	26	前方後円墳	全長 43m、前方部 18m、最大幅 22m、後円部径 27m、三段築成	4 世紀初頭
W	5+6	前方後円墳	全長 65m、河原石の葺石、竪穴式石室か(2014 年詳細測量調査実施)	4 世紀後半か、船来山古墳群最大規模
G	262	不明		
R	99		全長 35m、木棺直葬	4 世紀後半
J	37		全長 30m、木棺直葬	ピンク色の水銀朱
N	35		全長 30m	
N	36		全長 20～30m	
Q	98	前方後円墳	全長 39m、割竹形木棺、竪穴墓壙	4 世紀後半
V	81	造り出し付円墳	全長約 25m (2013、2016 年詳細測量調査実施)	淡輪技法の円筒埴輪片
V	68	円墳	直径約 20m (2013 年詳細測量調査実施)	
V	12	前方後円墳	全長約 25m、周辺にも別の古墳が存在する可能性あり (2014、2016 年詳細測量調査実施)	
Y	64	前方後方墳	全長約 22m (2017 年詳細測量調査実施)	
Y	3	前方後方墳	全長約 20m (2018 年詳細測量調査実施)、後方部の一部が四阿設置により削平	

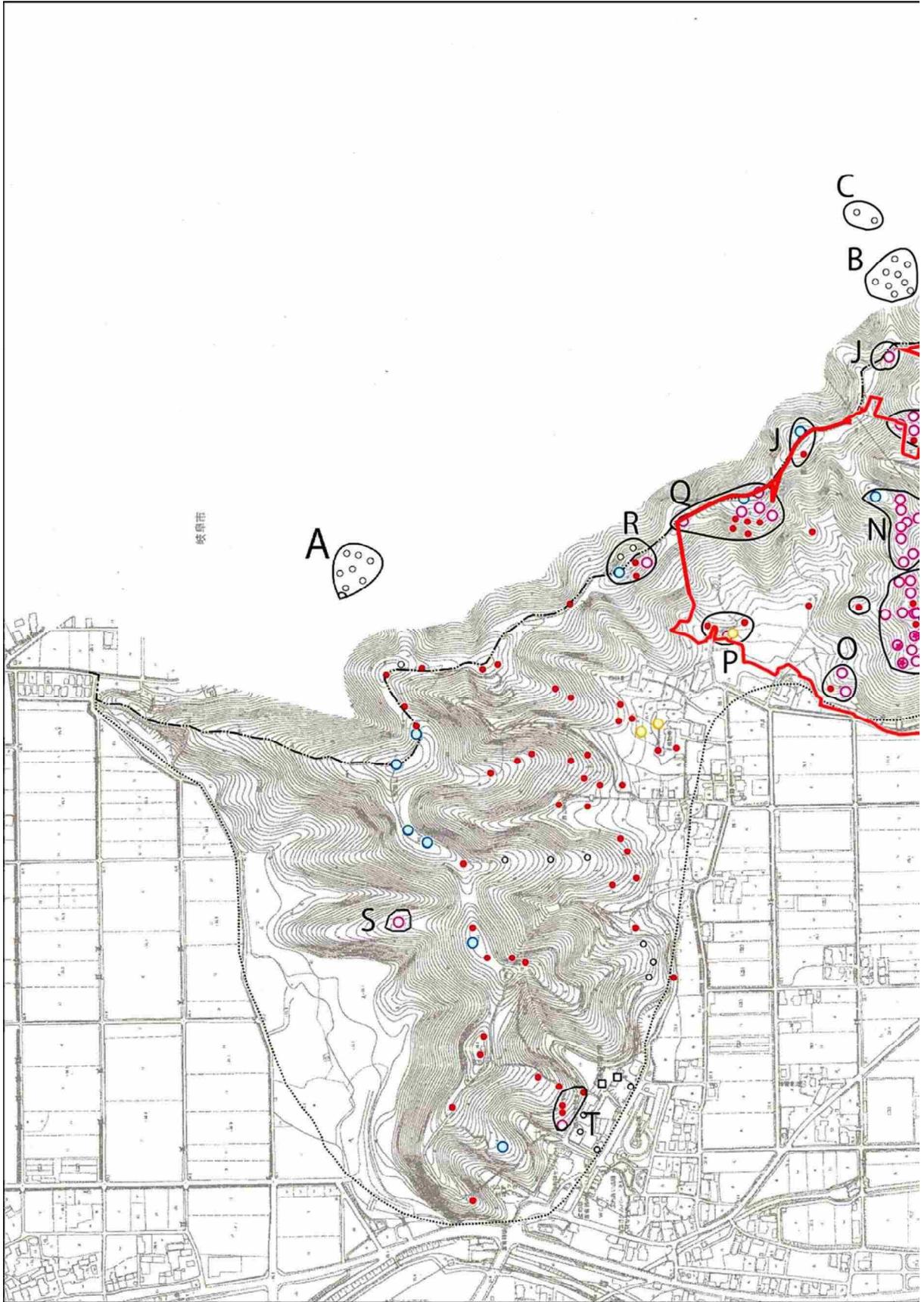
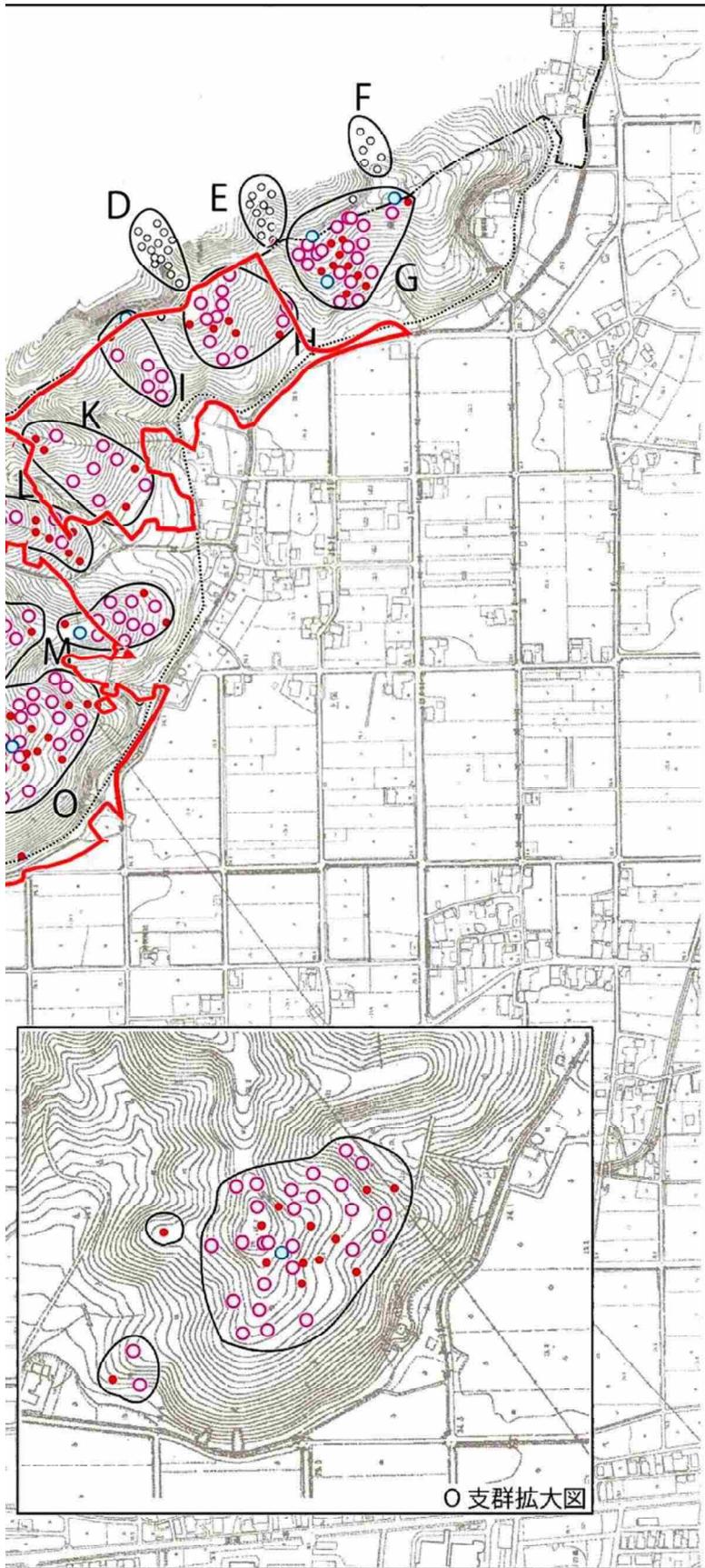


图 7 船来山古墳群



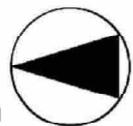
<凡例>

- : 前期古墳
(3世紀中頃から4世紀後半)
- : 中期古墳
(4世紀末から5世紀後半)
- : 古墳後・終末期
(5世紀末から7世紀)
- : 年代が推定されていない古墳
- : 消滅もしくは
確認できなかった古墳

⋯ : 本巢市船来山古墳群範囲(仮)

※「本巢市詳細遺跡分布調査報告書」(2012, 本巢市教育委員会)より船来山古墳群の遺跡範囲をトレース

0 100 250m



古墳分布図

<O 支群>

船来山中央部の濃尾平野にせり出した支尾根の南端にあたる。船来山古墳群の中で一番古墳が多く、造営幅が長い。標高約 81m から約 30m までの一帯に 42 基あり、弥生時代終末期の墳丘墓（方形周溝墓）1 基、古墳時代後期の古墳（以下「後期古墳」という。）41 基がある。石室内部にベンガラを塗彩した赤彩古墳が 3 基（19 号墳、272 号墳、274 号墳）出土し、雁木玉 2 個、斑紋トンボ玉 23 個、馬具、武具等の副葬品の豪華さは、他の支群に比べ際立っている。

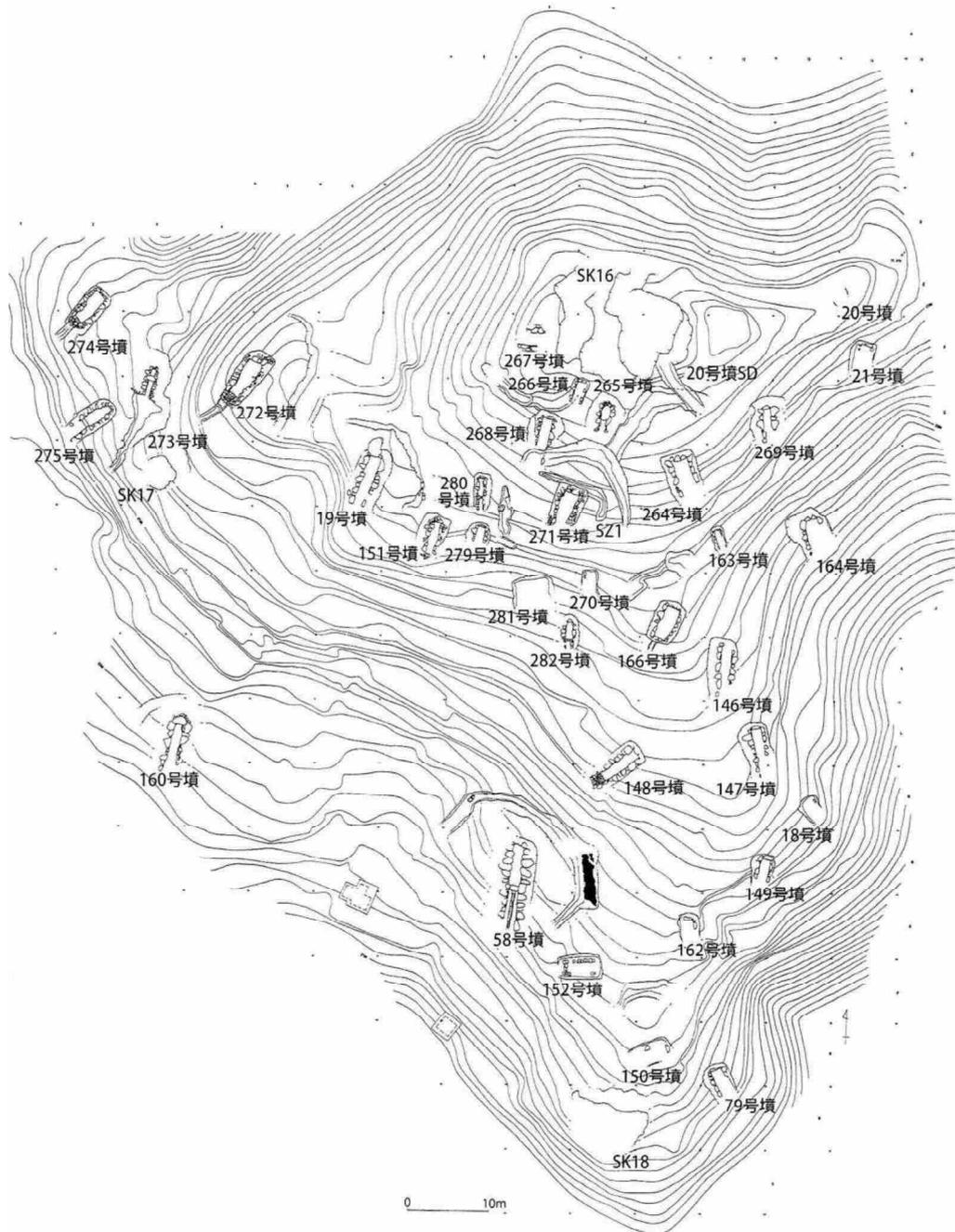


図 8 O 支群全体図（O 支群 42 基（方形周溝墓 1 基、後期古墳 41 基））

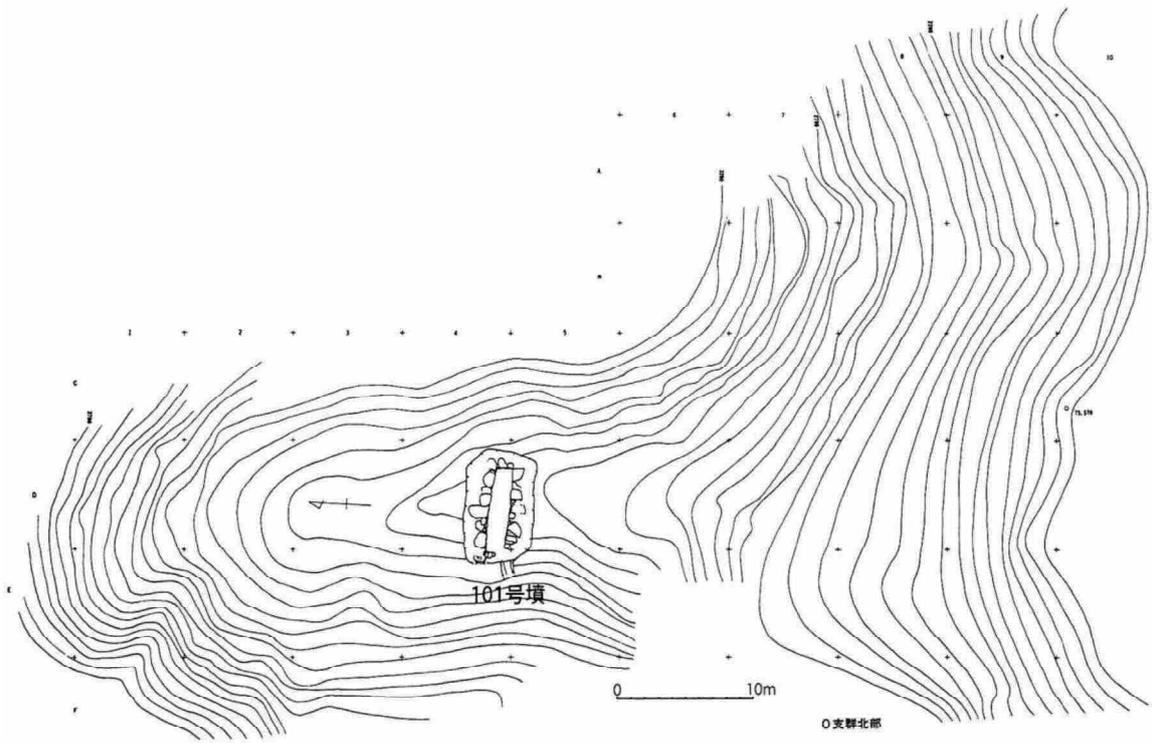
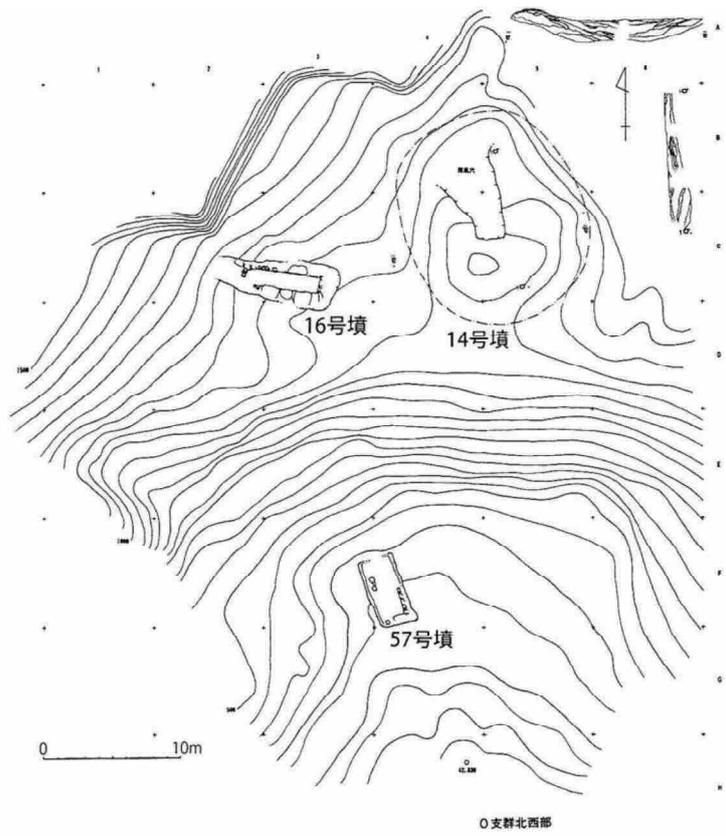


图9 O支群北·北西部平面图

<N 支群>

東西方向の主尾根から南西へ延びる支尾根の中腹一帯にある。O 支群の北東にあたる。標高約 94m から約 66m の一帯に古墳の基数は 14 基であり、古墳時代前期の古墳（以下「前期古墳」という。）2 基（35 号墳、36 号墳）と後期古墳 12 基である。35 号墳の前方部推定付近には後期の 138 号墳、139 号墳、140 号墳等が後に築造されている。

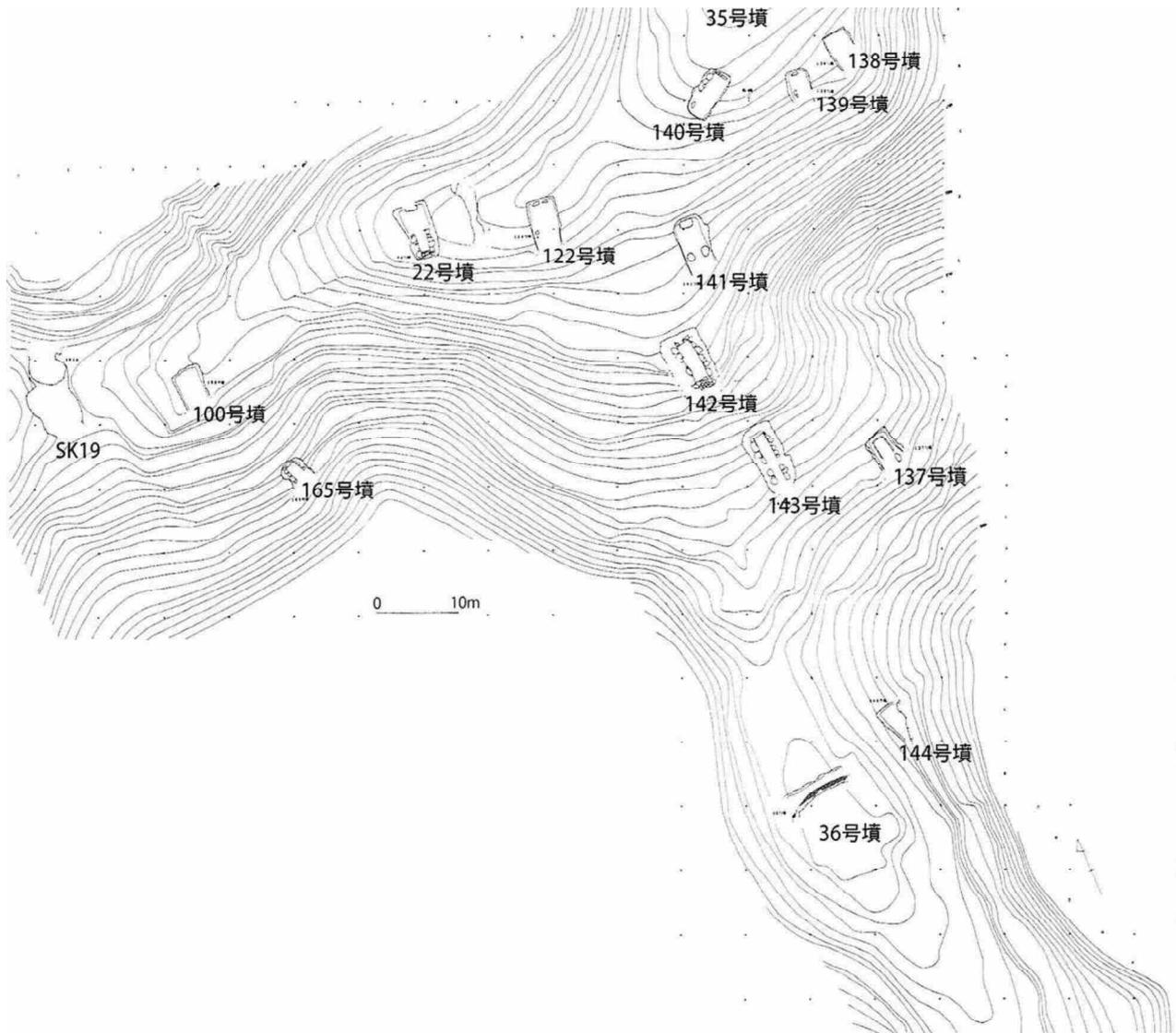


図 10 N 支群全体図〔N 支群 14 基(前期古墳 35 号墳、36 号墳、後期古墳 12 基)〕

<P・Q・R・S支群>

P支群は、O支群北隣の山麓にある支群である。標高約38mの一带に4基ある。Q支群は主尾根にあり、標高約98mから約88mの一带に12基（前期古墳98号墳と後期古墳11基）がある。R支群はQ支群西隣の尾根にあり、6基（前期古墳1基、後期古墳5基）がある。S支群は、船来山北麓にあり、標高約66mの地点に後期古墳1基（109号墳）がある。

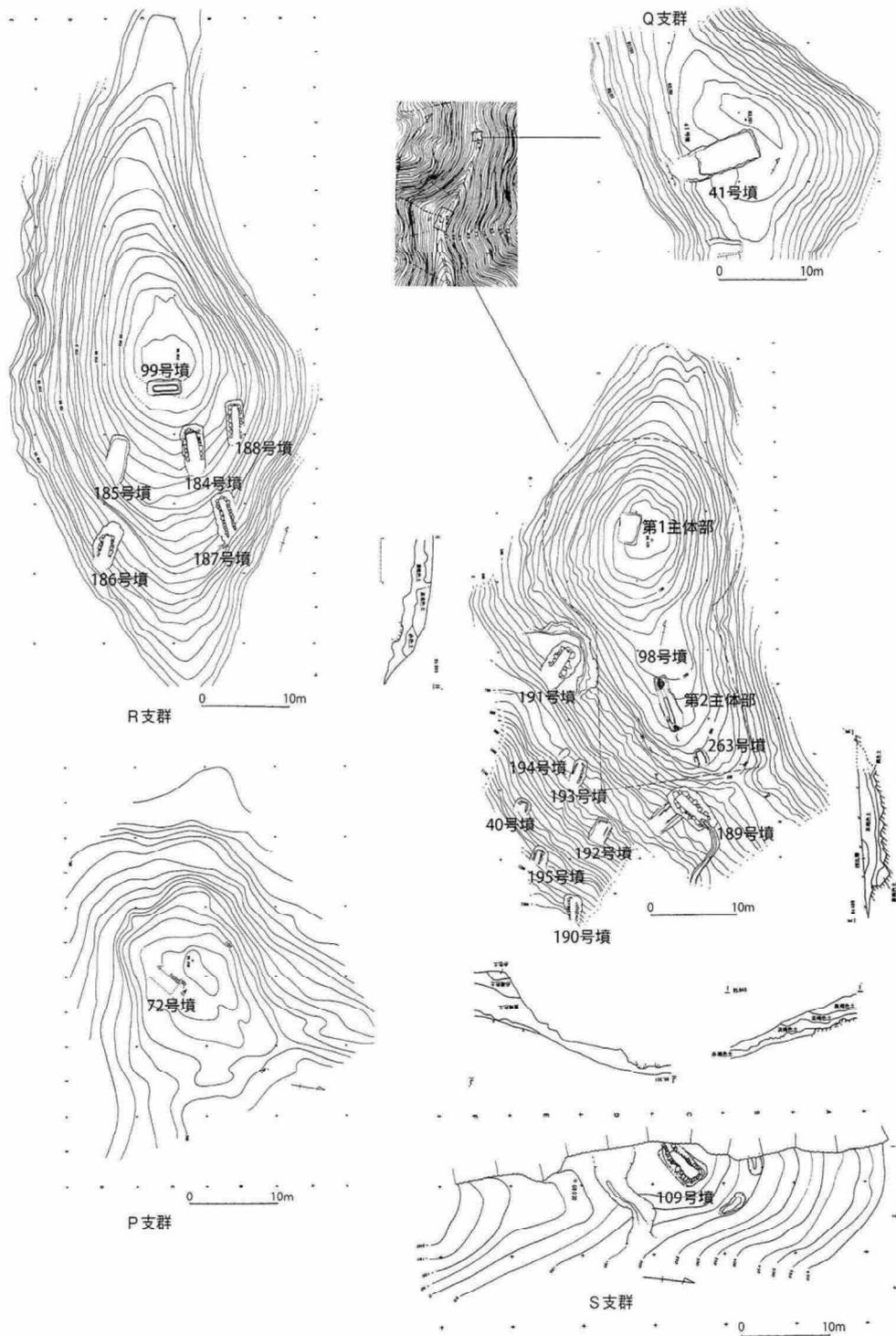


図11 P・Q・R・S支群全体図〔P支群3基、Q支群13基(前期古墳98号墳、後期古墳12基)、R支群6基(前期古墳99号墳、後期古墳5基)、S支群1基〕

<M支群>

主尾根から南東方向へ延びる支尾根の南端一帯にあたる。濃尾平野にせり出した尾根にあたり、標高約61mから約39mの一带に後期古墳11基がある。古墳時代後期初頭の5世紀末(145号墳)から連綿と古墳が築かれ、7世紀中ごろまで長期にわたって造営が見られる。須恵角付盃、土玉が出土した176号墳など、他の支群の同時期の後期古墳に比べ、豊富な装飾品や特異な須恵器の出土等の特徴が見られる。

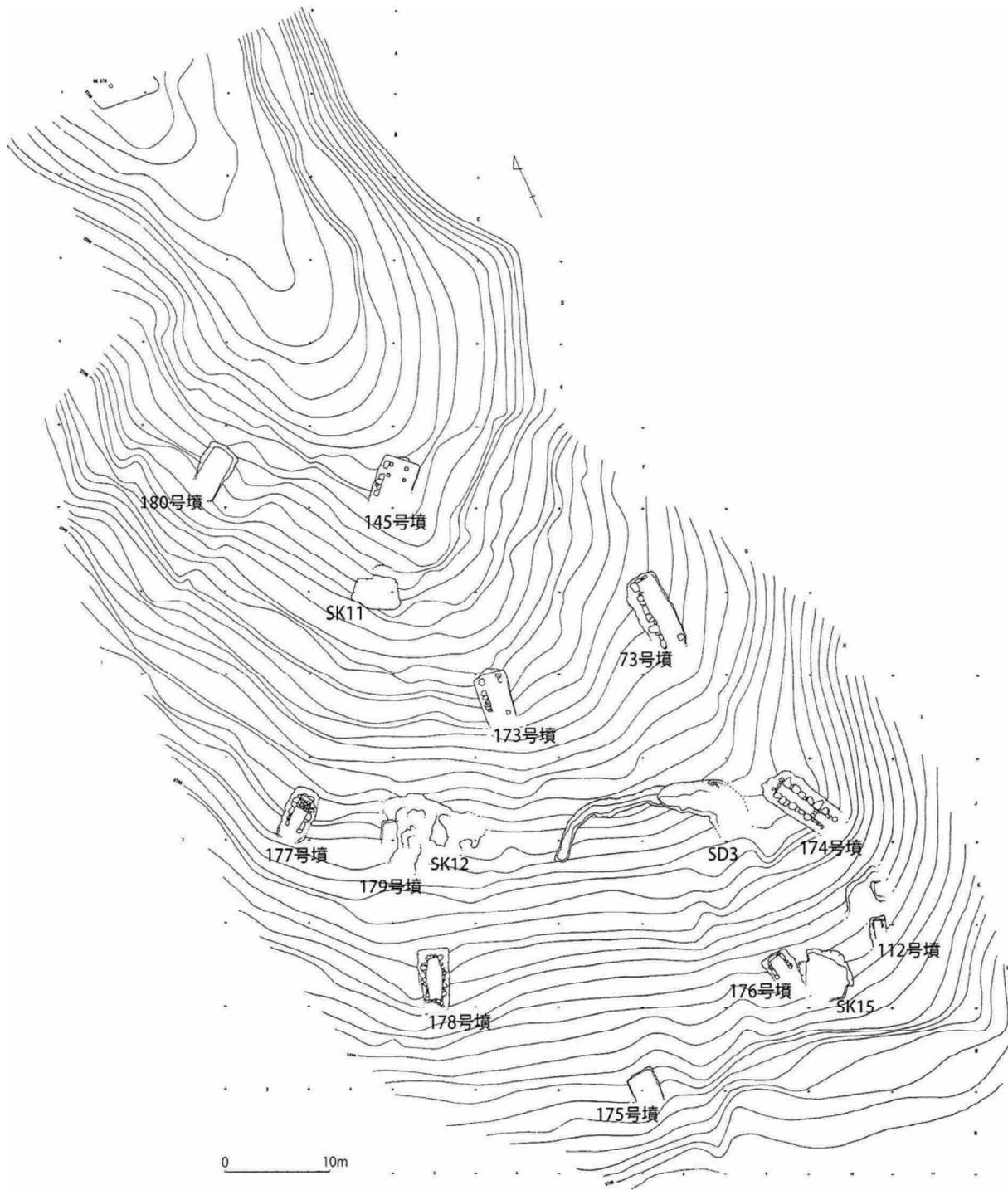


図12 M支群全体図〔M支群11基(後期古墳11基)〕

<L 支群>

主尾根から東南方向に延びる支尾根の舌状先端部であり、他の支群と比べると、谷筋の奥の地に造営された支群である。標高約 86m から 48m までの一帯に後期古墳 13 基が確認されている。最も高所に築かれた 97 号墳からは、銀象嵌が施された八窓鏝、銀製飾金具等の刀装具、鍔金具等の馬具等が出土した。7 世紀中ごろの 121 号墳からは、須恵器三足壺が出土し、特異な須恵器も見られる支群である。

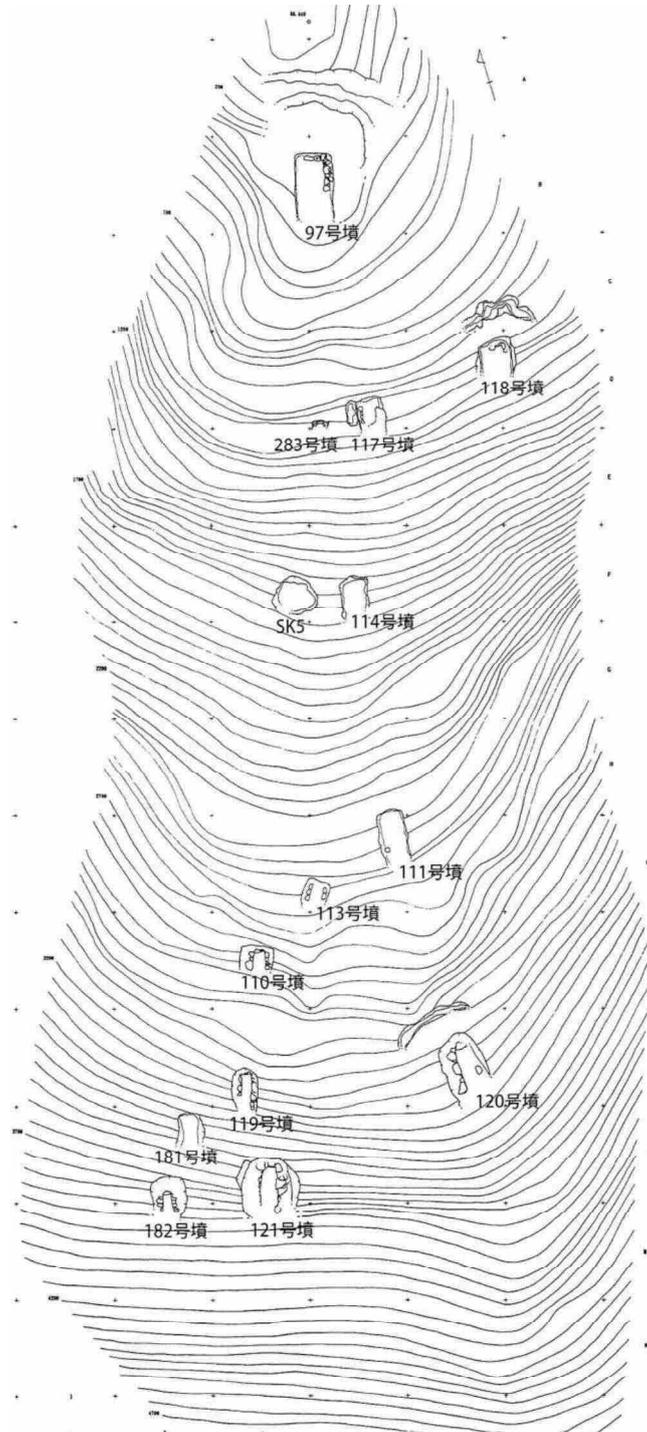


図 13 L 支群全体図〔L 支群 13 基(後期古墳 13 基)〕

<I・J支群>

I支群は船来山東部の支群である。標高約66mの主尾根から約51mの山麓まで広がる。古墳の基数は8基(前期古墳2基、後期古墳6基)である。前期古墳の24号墳からは、鏡5面のほか鉄剣、鉄刀、銅鏃などの豊富な武器類、装飾品が出土し、東京国立博物館に所蔵されている。J支群は東西方向に延びる標高約109mの主尾根上にある支群である。前期古墳1基、後期古墳2基の計3基がある。

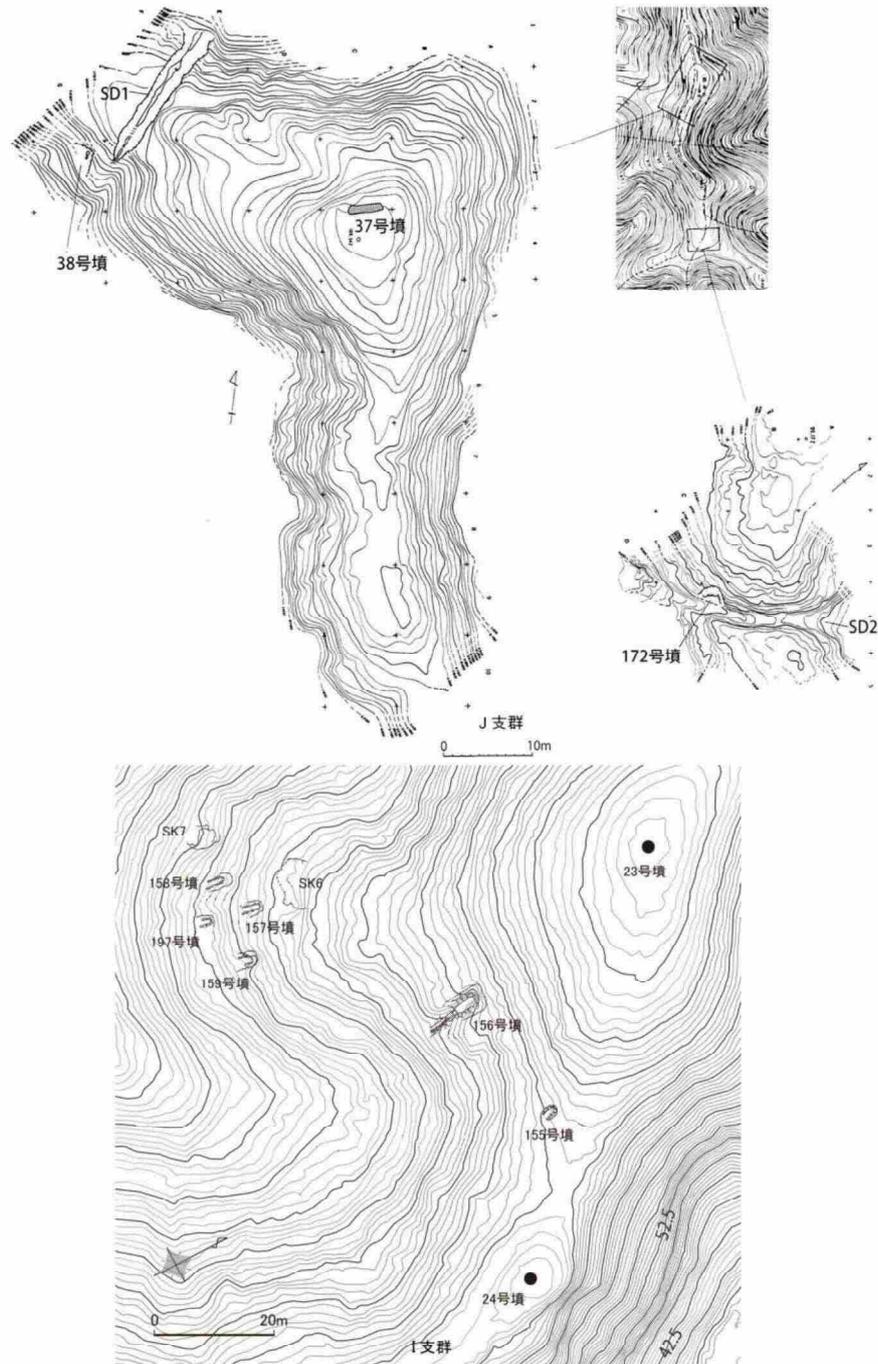


図14 I・J支群全体図〔I支群8基(前期古墳23号墳、24号墳、後期古墳6基)、J支群3基(前期古墳37号墳、後期古墳2基)〕

<K 支群>

主尾根の J 支群から南東に延びる I 支群に挟まれた支群である。標高約 83m から約 38m の一帯に、後期古墳 12 基がある。103 号墳 (6 世紀後半) は縦穴系横口式石室の系譜をひく横穴式石室であり、石室床面からは雲母片が出土したほか、馬具、鍬子、ミニチュア農工具、鍬鋤先、瑪瑙勾玉、土玉等豊富な副葬品が出土した。

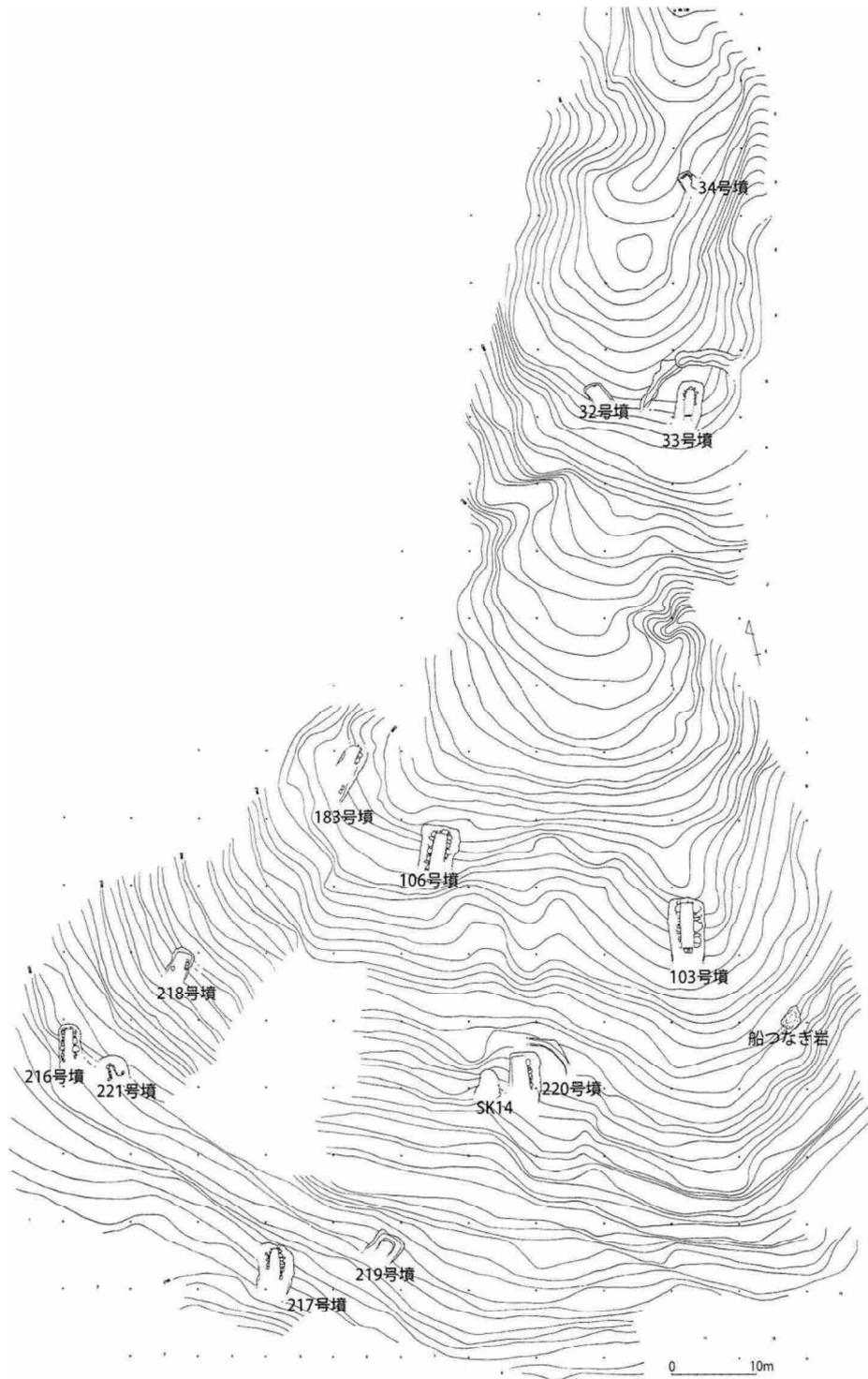


図 15 K 支群全体図〔K 支群 12 基(後期古墳 12 基)〕

<H 支群>

船来山東部の主尾根から山麓までの支群である。標高約 68mから約 39mの一带に築かれた古墳の基数は 18 基（後期古墳 17 基、時期不明古墳 1 基）である。154 号墳（6 世紀中ごろ）では、石室内に組み合わせ式石棺が発見された。石材はチャートであり、遠方から運ばれた可能性も考えられる。石室の形式は両袖式、無袖式等の多様な形式がみられる。

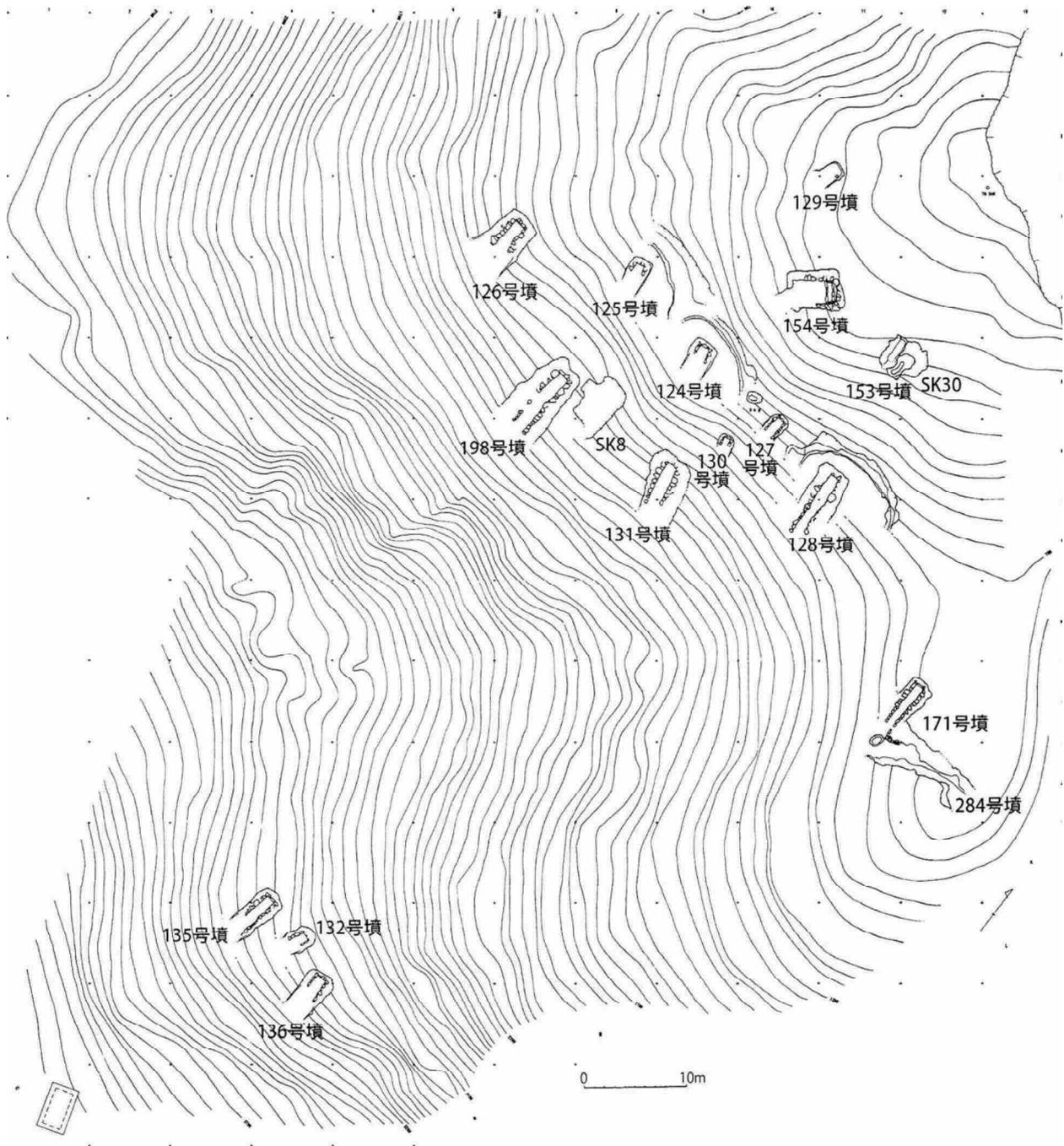


図 16 H 支群全体図〔H 支群 18 基(後期古墳 17 基)〕

<G 支群>

船来山東端にあたり、主尾根から山麓に広がっている支群である。標高約 64m から約 48m の一帯にあり、古墳の基数は 32 基（前期古墳 2 基、後期古墳 29 基、時期不明古墳 1 基）である。前期古墳には、26 号墳（前方後円墳、4 世紀）や、周溝より鉄製品農工具（鋤鋤先）が出土した 262 号墳（円墳）がある。29 号墳（6 世紀前半）は小型ながら、複環鏡板付轡、素環鏡板付轡、二条線引手、辻金具、貴金具等の豪華な馬具が出土した。

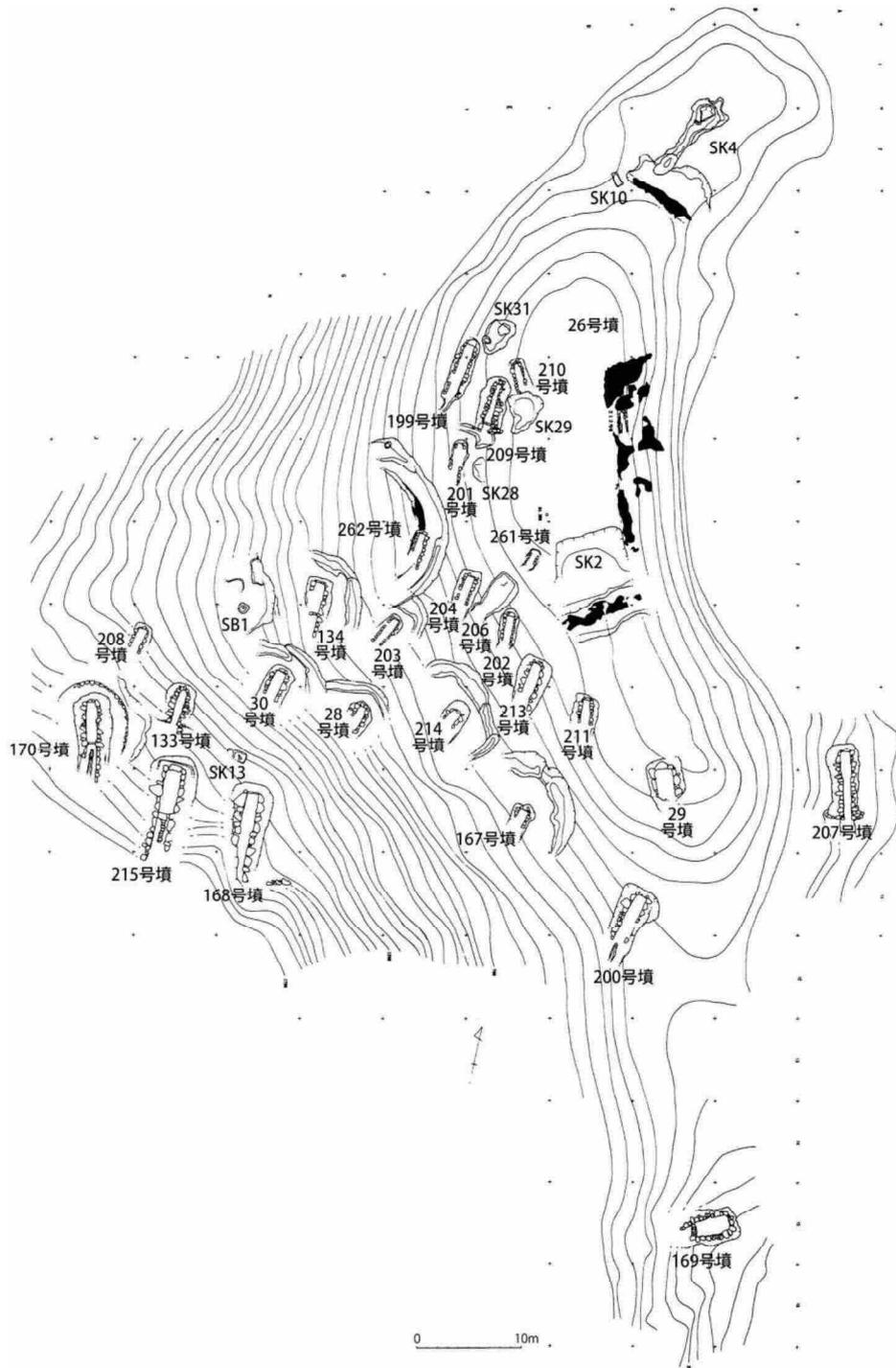


図 17 G 支群全体図〔G 支群 32 基(前期古墳 26 号墳、262 号墳、後期古墳 29 基)〕

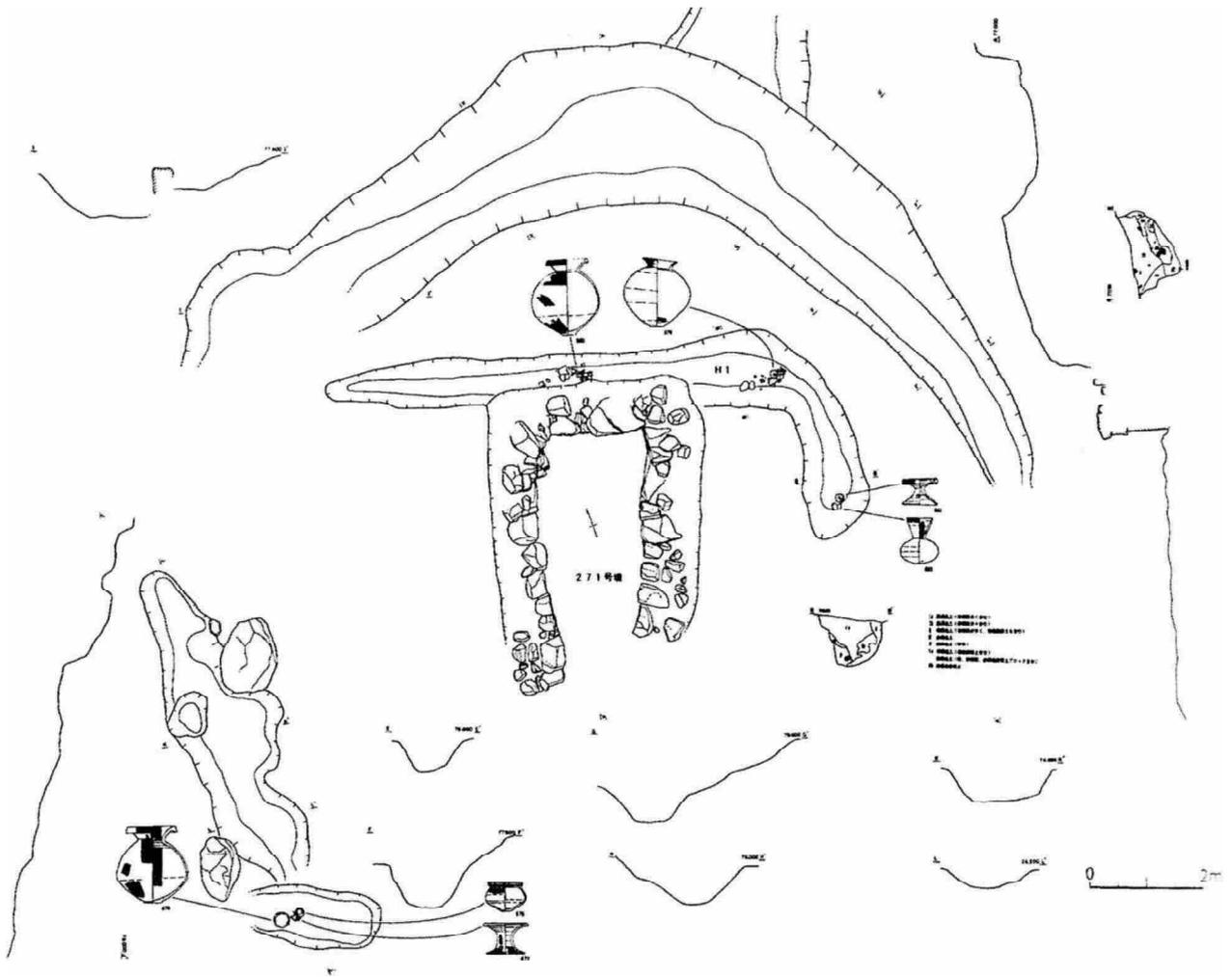


图 18 1号方形周溝墓 遺構图

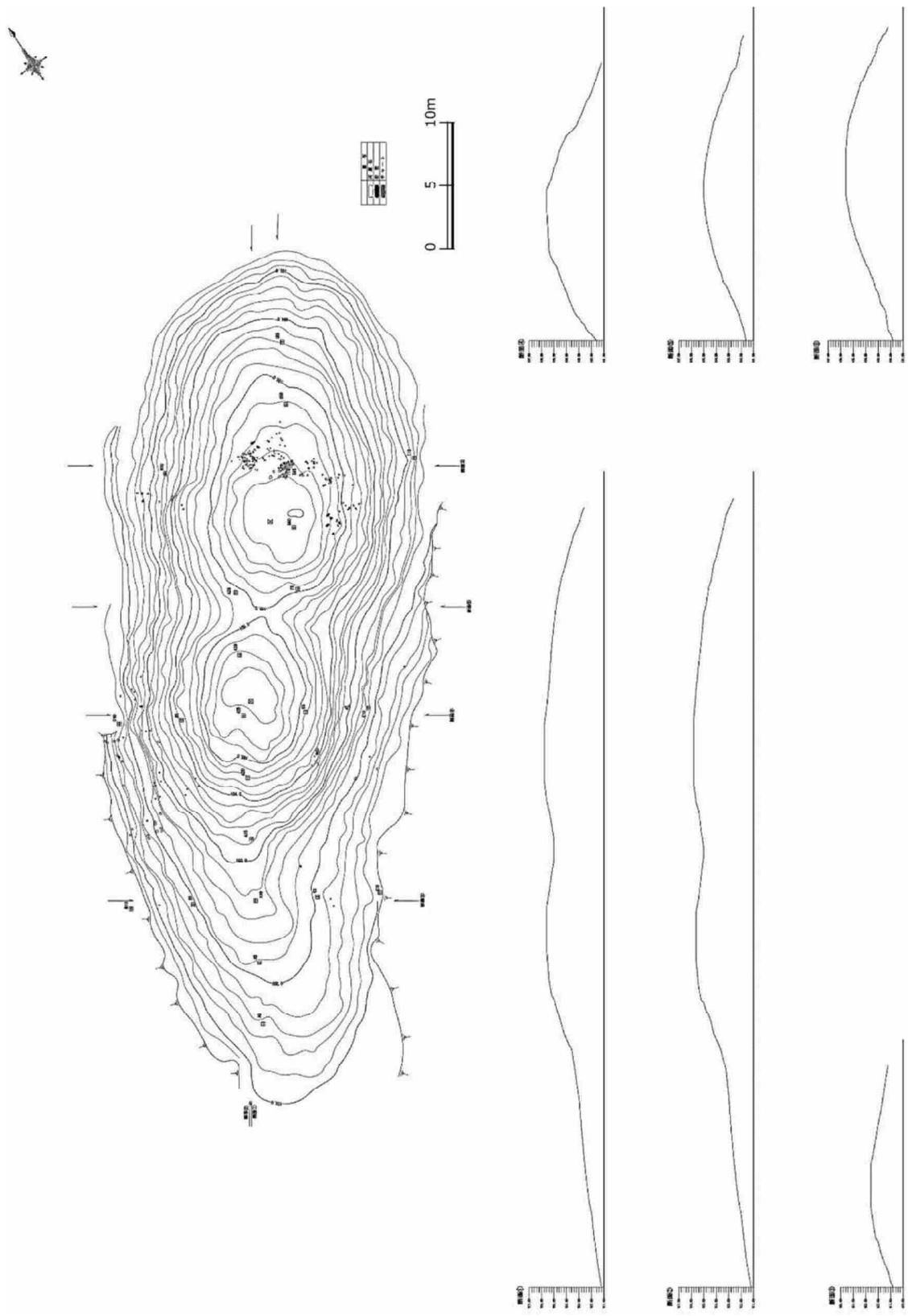


图 19 67号墳と76号墳 遺構図

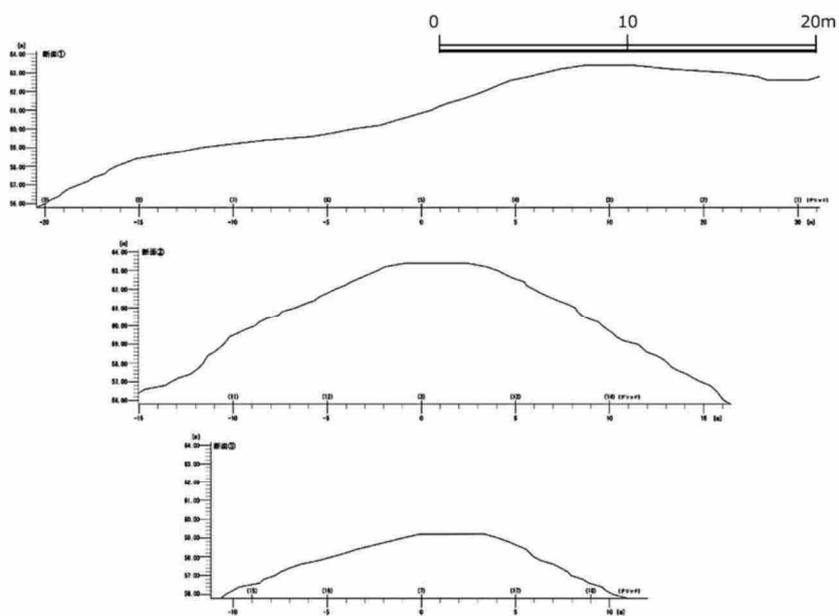
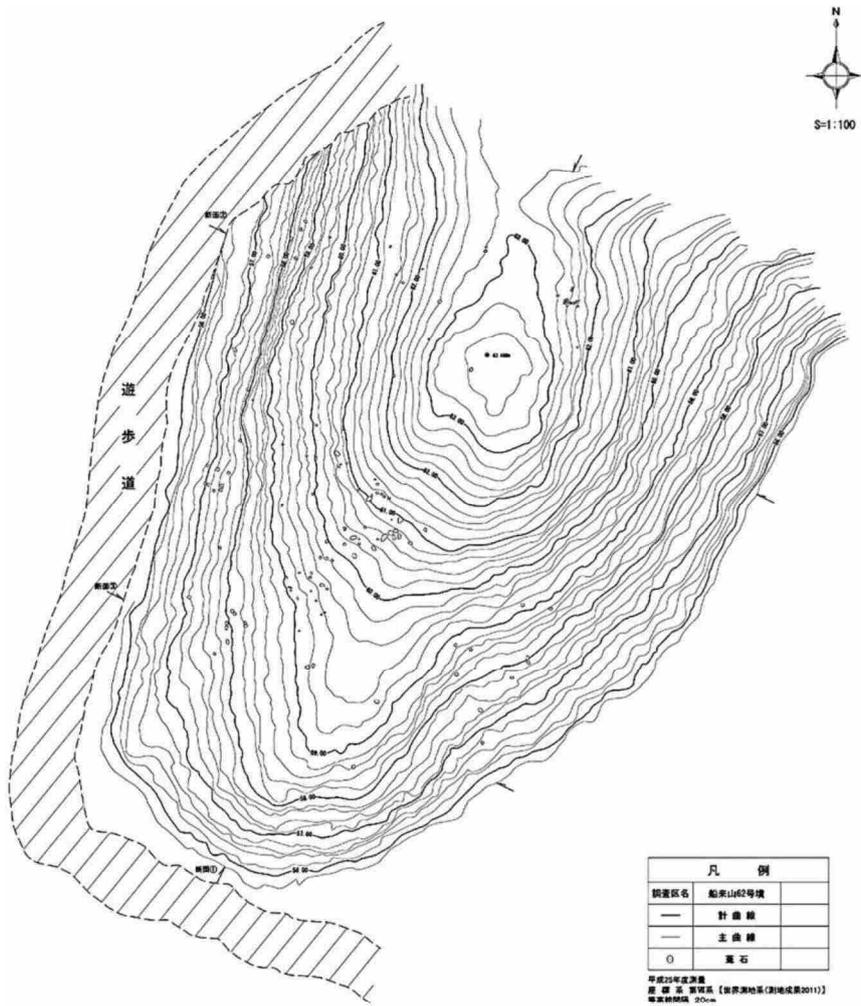


图 20 62号墳 遺構図

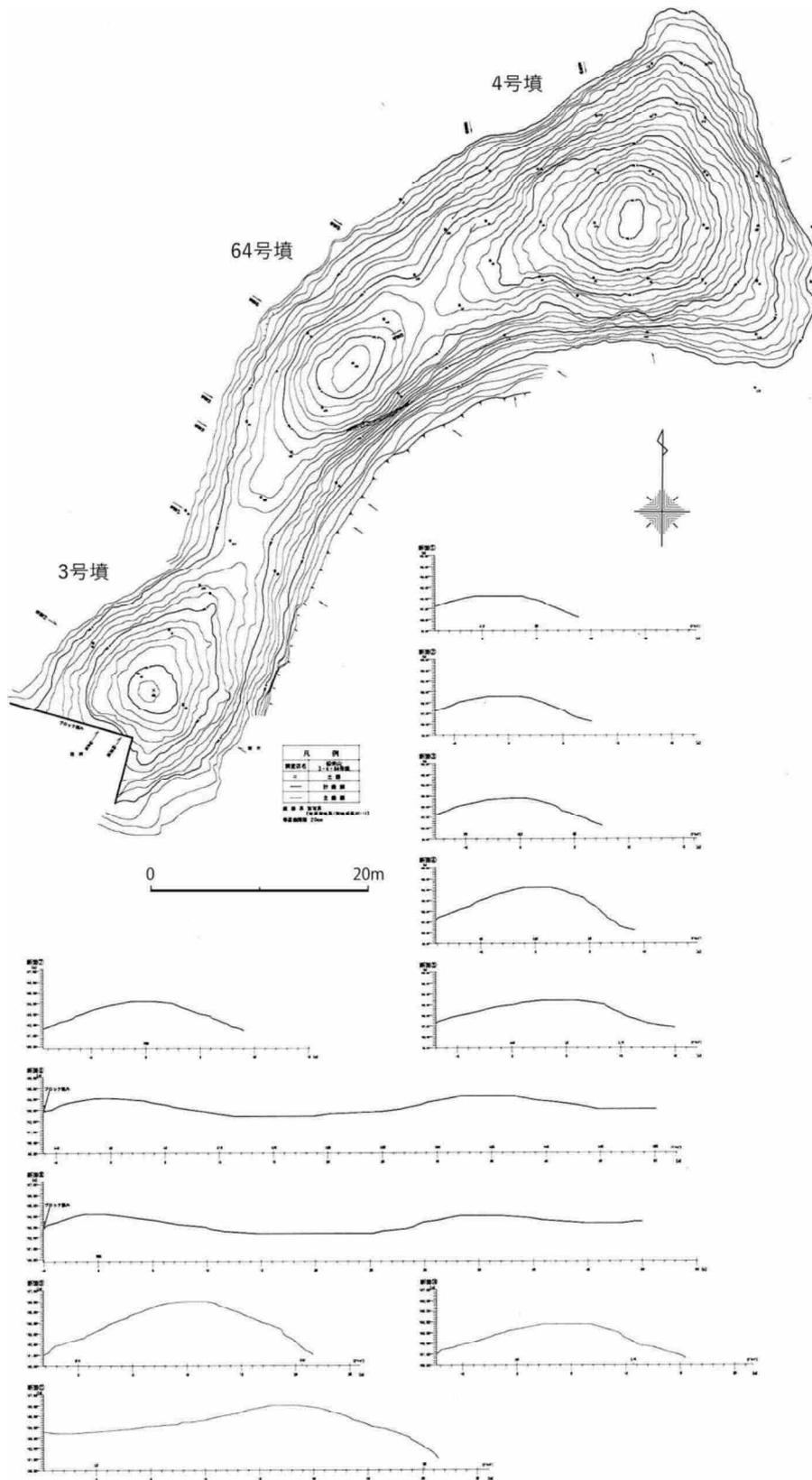


图 21 3号墳、64号墳、4号墳 遺構図

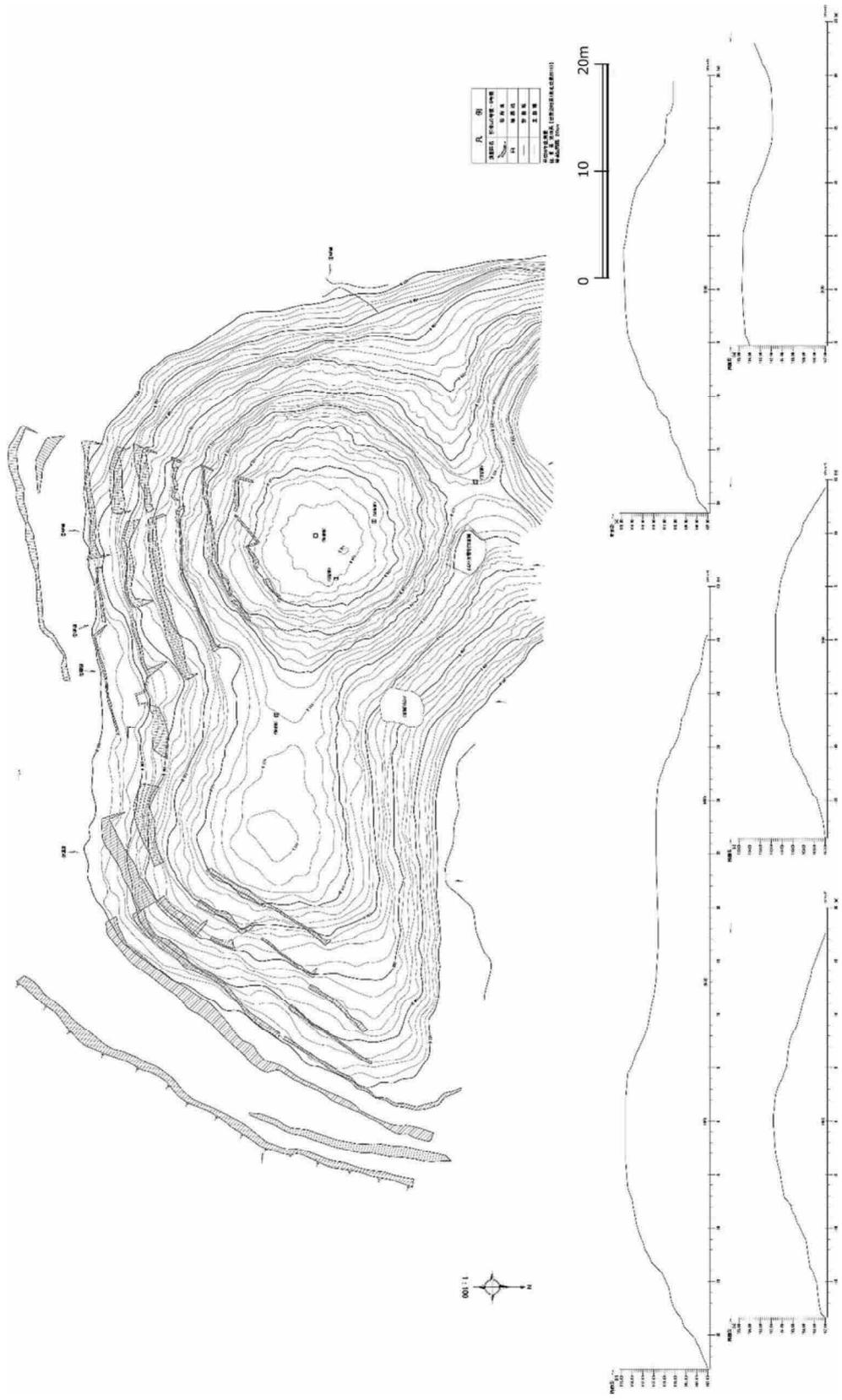


图 22 5号墳 遺構図

<東京国立博物館所蔵船来山 24 号墳出土品の資料調査>

東京国立博物館に所蔵されている船来山 24 号墳の出土品についての資料調査は、昭和 42(1967)年の発見から 50 年以上の月日を経て平成 30(2018)年に終わることができた(本巣市教育委員会 2018)。24 号墳は国史跡の指定地内に所在し、船来山丘陵の東側中央部の字「郡府山」、標高約 66m の主尾根上で発見された古墳である。出土当時の古墳の規模は、直径約 20m、高さ 2.5m の円墳で埋葬施設は割竹形木棺と推定された。今回の調査により、24 号墳木棺内から出土して東京国立博物館へ収蔵された内容は、銅鏡 5 面(仿製半円方形帯神獸鏡、仿製六弧内行花文鏡、三角縁六神鏡、六神鏡、上方作銘浮彫式獸形鏡)、石製品(石釧 114 点)、玉類(管玉 163 点、勾玉 9 点、ガラス小玉 252 点)、武器類(鉄剣 26 点、鉄ヤリ 2 点、鉄刀 8 点、鉄矛 1 点、銅鏃 34 点、鉄鏃 5 点、矢柄片 3 点)、農工具(鉄鎌 2 点、鉄鑿 1 点、鉄鋸 1 点、鉄錨 8 点、錐 1 点、鉄万子 2 点)、木棺(4 片、コウヤマキ)と判明した。

24 号墳のような小規模の古墳に、鏡が 5 面も副葬されたことが全国的に見ても珍しい事例であり、被葬者像を考える上で一つの手がかりとなる。いずれも倭鏡であり、それぞれの鏡の特徴から 4 世紀後半に製作されたと考えられる。24 号墳の鏡は、5 面の鏡のうち 3 面の大和盆地北部の政治勢力と関連が深い鏡が含まれている。このことから、24 号墳の被葬者が大和盆地北部の政治勢力と何らかの関係をもっていた可能性が示された(林 2019)。ガラス小玉については、大半が引き伸ばし技法によるアルミナソーダ石灰ガラス小玉であり、日本列島以外の場所から搬入された舶載品であることが判明した。算盤玉状のガラス小玉については、ウランを含有するアルミナソーダ石灰ガラスで、東南アジアに特徴的な組成であることが示された。また 6 世紀以降の他のガラス小玉との比較において、6 世紀後葉からガラス小玉を副葬する古墳が減少すること、主体が植物灰ソーダ石灰ガラス小玉に切り替わっていくことから、6 世紀後葉に画期が求められることが指摘された(加藤 2019)。農工具については、製作されたのは概ね古墳時代前期後半ごろと示されたほか、鉄鎌、鉄鋸等の詳細な観察により、儀礼目的で作られた非実用品が含まれていることが示された。6 種類もの多様な器種の農工具が出土していることから、地域の中で突出した首長墳でよくみられるような農工具が 24 号墳で副葬されているものの、副葬配置や組成から畿内中枢地域の農工具の在り方とは違い、地域内で儀礼が変容した可能性が指摘された(河野 2019)。また大変多くの武器類、特に刀剣類が多く副葬されたことは、被葬者の軍事的な性格を伺わせる可能性も考えられる。一方で 5 面の鏡や石製品、多数の多様な玉類、特に非実用的な農工具が副葬されたことは、司祭者的な性格も考えられる。

この 4 世紀後半から 5 世紀という過渡期の時期の美濃地域西部全体に視点を移すと、5 世紀は大野町にある野古墳群が全盛を誇る時期である。しかし、野古墳群が衰退する 6 世紀に入ると、船来山古墳群で爆発的に古墳が築造されるようになる。この背景には、各地域の政治勢力による「主導権争い」が生じていた可能性が高く、24 号墳の被葬者と畿内中枢地域と密接な関係が見られるほか、墳丘規模は小さいものの多数の豪華な副葬品の内容により、24 号墳の被葬者は地域の中で突出した首長墳であり上位階層であった可能性が考えられる。



图 24 24 号墳出土銅鏡（東京国立博物館蔵）